

## 繰り返される悲劇？

また、16歳の麗という名の女の子が、母親の暴力によって死亡するという事件が起きました。

容疑者である母親は、事件について黙秘しているようですが、警察の発表によると、逮捕された母親は2月28日の午後8時頃、自宅の居間で、岡山県内の高等支援学校に通う麗さんを全裸にし、ビニールひもで両手と両足首を縛り、その上で、翌3月1日午前1時頃までの約5時間浴室に監禁し、低体温症で死亡させたとしています。

母親は警察官が駆け付けた際、「しつけのため、縛って浴室に立たせていた。様子を見に行くと死んでいた」と話したといいますが、麗さんは身長1メートル37、体重27キロしかなく、また、手足などに複数の皮下出血の痕などがあったといえますので、普段に虐待が行われていたのではないかと考えられます。

無力な存在である我が子に対して、力ある親が一歩的に暴力を振るうという構図は、残酷としかいいようがありませんが、こうした事件が起こる度に、子どもたちの救いのない悲しみや絶望感にしっかりと対処できない、この社会の不甲斐なさに胸塞がれる思いがします。

勿論、事件を引き起こした親がその責めを負うべきは当然のことです。ただ、当事者を処罰するだけでは、問題が解決しないことは度重なる事件の発生を見てもわかります。

今回の事件については、詳細は殆ど分かっておりませんが、最悪の事態を防ぐことがどうしてできなかったのか、十分検証する必要があります。

麗さんには知的障がいがあったために、保育園に入園する以前から児童相談所に相談をしてきており、母親は、事件のあった日も医師に相談するため児童相談所に電話をしたそうです。しかし、当日は医師が不在だったため母親はそこで電話を切ったそうですが、仮に医師がいれば、あるいは最悪の事態は起こらなかったかも知れません。母親と児童相談所とを繋ぐ糸が非常に細かったことが、残念でなりません。

5年ほど前から、母親と麗さんの二人暮らしだったそうですが、もしも夫と一緒に麗さんを育てられる環境にあたらどうだったでしょうか。また、母親には両親はいなかったのでしょうか。母親の周りには、手を差し延べてくれる人の気配が感じられません。

児童相談所は、以前から虐待の事実を把握していたといえます。麗さんが中学時代、

学校から虐待を疑わせる報告が4回あったにもかかわらず、結局は事件を防ぐことができませんでした。児童相談所としての目線がどこを向いているのか、正直気になります。もう一步踏み込んだ対応をするにはどうすべきか、しっかり考えていただきたいと思います。

また、学校は、どうしていたのでしょうか。日常、麗さんと接する中で虐待の事実を把握できなかったのでしょうか。麗さんの発するシグナルを、見落としていなかったといえるのでしょうか。また、母親をどのようにサポートしてきたのでしょうか。考えるべきことは沢山あります。

子どもは、親から愛されるためにこの世に生を受けたはずです。そして、親は、子どもに無償の愛を注ぐことによって人として成長していくのだとも思います。

麗さんとその母親は、今回の事件によって、愛される喜びや愛することによって成長する喜び、そしてその喜びを共にする機会が永遠に失われたことを、心から悲しく思います。(塾頭 吉田 洋一)